

洛友会会報

京都大学工学部電気系教室内
洛友会
京都市左京区田中大堰町49
075-701-3164

洛友会顧問

前田憲一先生 追悼号

洛友会顧問・京都大学名誉教授、前田憲一先生には去る平成7年10月14日午前7時23分、享年86歳の天寿を全うされ御逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。



なお、ご葬儀は10月17日真宗大谷派岡崎別院で取りおこなわれま

した。次記に先生の御略歴を記し、御足績を偲ぶ縁といたします。

ご略歴

- 明治42年8月1日大阪府にて誕生される
- 昭和4年3月大阪高等学校理科卒業
- 昭和7年3月京都帝国大学工学部電気工学科卒業
- 同年4月通信省電気試験所研究員(平磯勤務)
- 昭和10年5月通信省電気試験所技手、平磯出張所所長
- 昭和16年5月日本ラジオ協会から功績賞を受賞
- 昭和17年4月文部省電波物理研究所研究官
- 昭和21年12月文部省電波物理研究所所長
- 昭和23年通信省電気通信研究所電波部長
- 昭和24年2月通信省電気通信研究所基礎部長
- 同年6月電気通信省電気通信研究所基礎研究部長
- 昭和27年8月日本電信電話公社電気通信研究所基礎研究部長
- 昭和28年京都大学工学部教授
- 昭和30年5月電気通信学会副会長
- 同年同月電気通信学会より功績賞を受賞
- 昭和38年4月京都大学評議員
- 同年5月日本地球電気磁気学会委員長
- 昭和39年1月京都大学工業教員養成所所長併任
- 同年7月東京大学教授宇宙航空研究所併任
- 昭和42年5月電気学会副会長
- 同年同月電子通信学会会長
- 昭和45年3月東レ科学技術賞受賞
- 昭和45年6月郵政大臣より電波功労者表彰
- 昭和47年1月日本学術会議第9期会員
- 同年6月日本学士院賞受賞
- 昭和48年停年退官、京都大学名誉教授
- 同年同月京都産業大学教授
- 同年4月紫綬褒章受賞
- 昭和53年京都産業大学理学部長
- 昭和54年4月勲二等瑞宝賞受章
- 昭和56年京都産業大学定年退職
- 平成2年1月日本学士院会員に選出される
- 平成7年10月14日逝去される。

恩師前田憲一先生を 偲んで

木村磐根(昭30年卒)

京都大学名誉教授であり日本学士院会員であられました前田憲一先生は平成7年10月14日早朝肺炎にて逝去されました。享年86歳でありました。

ここに門下生を代表して慎んで追悼の言葉を述べさせていただきます。

前田憲一先生は、京都帝国大学を御卒業後すぐ、電気試験所に入所され、電離層観測の研究を手掛けられるとともに、電離層反射を考慮した短波帯電波の伝搬特性を理論的に予測する研究などで優れた成果を挙げられました。昭和17年には電波物理研究所の研究官となられ、昭和21年、36歳の若さで同研究所の所長となりました。昭和23年、機構が通信者に替り、電気通信研究所となつてからは電波部長、基礎研究部長などを歴任され、昭和28年に母校から乞われ

て京都大学工学部教授となられ、有線通信工学講座を担任されました。御停年までの20年間、京都大学にあつては、充実した教育と研究指導をおこなわれ、多数の優れた門下生を育てられました。また先生の御尽力により、昭和36年工学部付属電離層研究施設が設置されましたが、それが現在は工学部から独立して京都大学超高層電波研究センターへと発展しております。京都大学ご退官後は京都産業大学教授となつて教育・研究を続け

られました。

京都大学ご在任中の研究面では、現名誉教授である当時の坂井利之助教授とともに、音声タイプライタ開発を世界で初めて手掛けられました。また、一九五七—一九五八年のIGY(国際地球観測年)の機会に、日本の大学および研究所に広く呼びかけられ、ロケットによる超高層観測のプロジェクトを育てられるとともに、自らも上空での爆発音の地上までの伝搬特性を測定して、上空の風や温度の分布を求めるロケット実験を手掛けられました。これらの超高層観測プロジェクトが、後に衛星観測へと発展しましたので、前田先生は、日本の宇宙開発の礎を築かれた方と言えます。一方当時の電気通信学会に電子計算機専門委員会をつくられ、初代委員長として日本のこの分野の発展に寄与されるとともに、日本初のトランジスタ式電子計算機(KDC-1)の京都大学への導入を実現されました。

昭和7年の大学御卒業後から始められた電離層に関する御研究を、その後のライフワークとして続けられ、京都大学を停年ご退官後も電離層に関する理論的な研究を続けられ、10篇の論文として発表されました。最後のお仕事となりましたのは先生の83歳の時の論文であります。これらのライフワー

クとしてのご研究は、東レ科学技術賞、日本学士院賞、紫綬褒章、勲二等瑞宝章の御受賞(章)につながり、また平成2年1月には日本学士院会員に選出されました。

前田先生はこのように、生涯を学者・研究者として貫かれた方であり、厳しい先生という印象を持っている門下生もいるようではあります。酒席ではユーモアあふれた軽妙洒落なお話で我々を楽しませて下さいましたし、お宅でも奥様とはいつもウィットのある会話をなさっておられたことを伺っております。本当に人間味のあるふれた豊かな素晴らしい人生を送られたと申せましょう。

先生は3年前、腸の手術を受けられました。すっかり良くなりました。平成7年のお正月にも昔のようなユーモアのあるお話が出て、元気になられたことをお慶びしていたのですが、夏の厳しい暑さのせいもあり、8月中旬から衰弱して入院されました。幾度かお元気になられ、病床でローレライの歌をドイツ語で全曲唄って聞かせて下さったりしたときもあり、ご回復を心から期待しておりましたが、2ヶ月後その期待もむなしく不帰の人となられました。

なおご葬儀は平成7年10月17日浄土真宗岡崎別院にて行われましたが、陛下から「祭し(次の字の

下に米を書く)料」の下賜があり、学士院会員山村昌先生、並びに龍谷大学理工学研究科長坂井利之先生からご弔辞を頂きました。

私は先生が京都大学に赴任されたときの最初の授業を受けた学生の一であり、昭和29年から卒業研究、修士論文、博士課程の研究のご指導を受け、引き続き研究室のスタッフとしてご薫陶を受けて参りました。ここにご紹介させて頂きました様に、前田先生は研究者としても人間としても本当に鑑とするにふさわしい方でありまして、先生の門下生として長く先生の警咳に接することができました。ことを心から感謝致しております。

最後に先生のご冥福を心から祈り申し上げ、お別れの言葉とさせて頂きます。

前田憲一先生の想い出

永田良孝(昭7年卒)

今度洛友会報4月号に前田憲一先生の追悼特集をするとの事で先生に同氏の想い出話でも書く様にとの御依頼がありました。前田兄が亡くなられて早や2ヶ月半、省みますと色々の想い出が次々と浮かんで参ります。前田兄と小生

は高校、大学を同じくし揃って当時の通信省に入社した関係もあり特に友人として親交を重ねたので想い出は尽きません。

5、6年前であったかと記憶しますが、3年前前に洛友会会報に同君との交友状況を書かして戴いたが、これ等の記事も今は想い出話となつてしまい、そのメモも今再読しますと当時の事が深く想い出されて参ります。高校、大学を同じくし、また通信省入社以来長期間真に心からの友人であった同氏が世を去り早くも3ヶ月以上を経過してしまいました。同君の生前の事は今も鮮明に心に浮かんで参ります。洛友会会報に同君との交友メモを書かして戴いたその当時は、同君は学士院会員に選任され益々張り切っておられて時代でした。学士院賞の審査には自己の学問外に属する分野の知識も相必要なので毎月その調査のため度々上京する等強い意欲を示しておられた様でした。

大高時代には当時黄金時代の大高ラグビー部に入り、スポーツに青春の情熱を燃やしながら学業成績は抜群で、我々の担当のI教授が自分に漏らされたところによると、同君の学業成績は大高創立以来最高位との事で、その事で、同教授は前田兄の将来に対し何かと相談に乗っておられた事が今鮮明

に記憶に残っており、我々の卒業時期は非常に不況の時であったので、京大でも前田兄を含め僅か3名のみが卒業と同時に就職が決定されたと言う状況の中で、前田兄は直ちに通信省電気試験所研究室生となり、研究関係から主として茨城県の平磯出張所において先輩の難波先生の下で電波伝播の研究を行われる事となったのですが、自分は当時通信省工務局でその頃東京台湾間の写真伝送の実験を行っていたので、仕事の関係もあり週末には平磯へ出張し実験の問題点を話し合い、また時には那珂川名物の鰻を賞味しながら友情を深めた事等忘れ得ぬ想い出です。

その後自分は大阪へ転勤となったので、お互いにお会いする機会も多くなり、近郊のゴルフコースへ一緒に出掛ける事も多く、また大阪の近郊に住む同期生が毎月1回大阪の電気クラブで会食していましたが、前田兄も時々京都からこれに参加して巧みな話術で一同を笑はしたりしてくれました。

自分は毎年年末にはN.T.T.の寮で正月を迎える事にしていたので、正月の2日か3日には寮の近くの前田兄の家を必ず訪ねて雑談を交わし友好を深めたのでありました。自分は学士院会員は最高の名誉職と思つていましたが、前田兄の話では学士院賞のための論文の審査

には専門外の知識も相当必要であり、毎月上京しては新しいテーマについて研究を重ねる必要があり、晩年も大変忙しい日々を送っておられた様でありました。尊敬する前田兄に心よりの想い出話をお送りします。

前田憲一先生の思い出

坂井利之(昭22年卒)

前田憲一先生の告別式に参列しましてからもう4ヶ月にもなりませんが、つい先日のように思われてなりません。

私が前田先生のお名前を知ったのは、大学の学生ときです。本屋には電気関係の本が少なかつた中で、林龍男さんと共著の「周波数変調」というのを見掛けたのです。

次は、昭和27年9月に、私は大学院特別研究生を修了し、電気の古いレンガ建ての会議室で、お昼の会食に列席している時に、阿部清先生から「三顧の礼をもって前田君に母校に来て貰う」と言われた時でありました。それから何月か後の昭和28年2月に東京から京都にお越しになるときに、阿部先生はこんな言い方をされました。

通研の基礎研究部長さんをお迎えるのだから、官舎を是非空けて貰うように大学の事務に言っておく。京都は空襲で焼けてないとは言え、大変なお方だと思つたものでした。先生は京大を昭和7年にご卒業で、若くして電波物理研究所長をされていて、管理職と研究とを両立させて、上手にやってこられたのですが、その後ご退官になるまで、20年近く勉強させて戴きました。

昭和28年2月、京大電気の教授として着任されてからは、本当に電光石火のような速さで色々なことを始められた。学生部委員、宇宙開発審議会委員、郵政省電波技術審議会委員、などでありました。これらは別稿のご略歴に現れた公職として京大、東大、学会、政府、N T T関係のもの以外のものであります。私が、私は大学研究室の創設期に、前田先生がタイピングよく、

ときばきと、政策的にも学問的にも上手にやってゆかれたお仕事を描出したいために、ご着任10年余のことを列挙したのであります。

電気通信、俗に当時言っていた弱電の内、電気通信の学科は京大にはなかったのです。しかし昭和33年には、日本で最初の電子工学科の卒業生を出しております。ご着任になりましたのは、有線

通信工学講座ですが、直ちに教室の助教、講師数人に声をかけられ、一緒に通信理論・サイバネチックスに関するウイナーの本などの輪講をやり始めました。また大学の中、関西だけでなく、日本中色々な学会の研究会に参加するように導き下さいました。東京で催される通信学会の「電子計算機」研究会の会合だけでなく、N T Tの研究所、九州でのサイバネチックスの研究会などへも一緒に連れて行って貰いました。

前田先生は、初対面の人を単に人名で紹介されるだけでなく、先生の寸評を入れたコメントを前後の適当な時に、教えて下さるので、それが後になると、実によく適合しているので驚くことばかりでした。

京大電気のレンガ建ての建物の横に木柱のつぎ足して、高い電離層観測用のアンテナを建てられたり、文部省から機関単位(工学部)の研究費として、数年の間に、「電子計算機」「音声符号化装置」などを代表者として取られました。

これらが、今日のコンピュータ情報処理で「西高東低」と国内で言われてきた出発点にもなっています。宇宙時代のロケット、それを地球環境の観測の一環として開始され、それが今日では大きく育つてきています。

学生や教官に柔らかな感じで接しられ、誰でも「マエケンさん」と言える雰囲気がありました。ご着任初めての卒業生(特別研究指導)すなわち昭和30年前後の人々が、特に印象強く思っておられるのも、うなずかれる事柄です。学生のコンパなどで、先生の若かりしころ、卒業後の電気試験所平磯出張所でのお話など、皆がよく知るところです。

前田先生を母校にお迎えして、

合掌

恩師前田憲一先生を 偲ぶ

井上誠一(昭28新卒)

尊敬する前田憲一先生が御他界されてから既に半年、日を追う毎に研究者、指導者としての先生の偉大さ、人間味溢れる器の大きさに對し、新たな感慨を禁じ得ない昨今です。

私は不肖の門下生ではありませんが、先生が京都大学教授に着任された直後から懇篤な指導を賜わり、類稀なお人柄に接する機会を得た者の一人として、師の有難さを振り返ってみたいと思います。

新分野の開拓

京大教授に就任された前田先生

非常に短い間に電気関係学科の構成も内容も激変しました。加藤信義先生、阿部清先生、林重憲先生などと協同して、大きい時代の曲り角を、うまくやって戴いたことは、明らかです。30年もたつていますので、歴史的スケールで、前田先生のご業績といえると思存します。先生、本当に大変大きいお仕事をされご苦労さまでした。適当に人生もエンジョイされましたことも含めまして。

は既に電波物理の世界的権威、通信技術の大家であり、新発足した前田研究室は多くの魅力的な研究テーマを掲げ活気が漲りました。

その中で先生は、御自身の専門分野にとじまらず、情報工学等時代を先取りする新分野の研究の開拓にも意を注がれました。研究のため議論は開かれた環境で進められ、前田先生は当時注目を集めていた情報理論やサイバネチックスの勉強をしようと提案され、教室内の先生方をはじめ私共大学院学生も参加させて戴いて自由な議論をしたことなどが懐しく思い出されます。先生の時かれた種はその後大きく成長し社会に貢献しつつあることを思うとき、先生の慧眼と指導力に改めて敬意を表さずにはおれません。

率先垂範

活気ある研究環境を作られた前田先生は、御自身も新しい分野の研究にチャレンジされました。先生は情報理論の応用例として、音声の聴取機能の新しいモデルを考案し、これに基づいて導出された明瞭度と了解度の関係および会話単語のエントロピーに関する論文を通信学会誌に発表されたのです。

当時、助教授の坂井先生の下で音声の研究をスタートしたばかりの私にとって、前田先生のこの率先垂範は大変なインパクトとなり、研究意欲をいやが上にもかき立てられたことでした。

交流の有難さ

前田先生はまた、外部との交流にも殊の外、意を注がれました。先生は他の大学や研究機関の錚々たる方達をよく私共の実験室に案内され、私共は緊張の面持ちで研究内容を説明したこと、また外部の先生方との意見交換の場にも加えて戴いたことなどが思い出され、このような交流に配慮して戴いたことがよい刺激となり、その後の研究の推進にも少なからず役立ったことを心から感謝しております。

指導の極意

私の研究も一応の進展を見、少し自信も芽生えてきた頃、学会で生意気とも受取れる質問をしたことがありました。程なく前田先生からやんわりと御注意を受けまし

た。先生のコメントは決して厳しい叱正ではなく、これだけのことを指摘すれば分ってくれるだろうという主旨であり、私もすぐ反省しその後も服膺につとめた次第です。

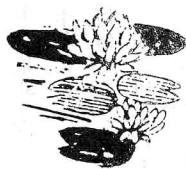
私が社会人となつてからも、折にふれて御指導を賜りましたが、私の近況報告を熱心に聞いて下さり、その都度、世の中の動向や産業界の本質を見通した含蓄あるコメントを丁寧し感服させられました。

思うに前田先生は、私共に自己啓発を尊重し、それを進めるため適切かつ効果的な助言を惜しまれなかつたすばらしい指導者であつたという感慨を深くしております。

前田先生はまた非常に楽しく気さくなお人柄で、我々に多くの楽しい思い出を残して戴きました。宴席など学業をはなれた場でも学んだ事は多く、恩師の有難さを重ねて痛感しております。

尊敬する前田先生の偉業、温容を回想し、心から御冥福をお祈り致します。

以上



前田憲一先生と KDC-I

矢島脩三(昭31卒)

20世紀も終りを告げ21世紀を迎えようとしている現在、世の中にデジタル情報革命が起りつつあります。

前田憲一先生は、ライフワークの電離層のご研究に加えて、50有年前の昭和28年(一九五三)、日本電信電話公社から母校に教授としてもどられて、京都大学に初めてデジタル技術の種を蒔かれまして。デジタル技術が大輪の花を咲かせているとき、先生のご逝去は、惜しみて余りあることで、謹んで哀悼の意を表します。

先生は、京大で初めてデジタル計算機に係わる卒業論文テーマをお出しになり、小生はそのテーマをいただき、一九五五年に前田研究室の学生になりました。後年さらにスタッフにまでしていただきました。ラジオ少年だった小生は先生のご専門の電波関係にも非常に興味がありました。当時全く未知の計算機の開発や研究をやらせてもらうことになりました。素晴らしい恩師と先輩、同僚、後輩に囲まれて心暖まるよき黄金時代を過ごさせていただきました。

世界初の真空管式電子計算機が戦後の一九四六年に稼動し、トランジスタが48年に発明されました。先生は、計算機の重要生をいち早く認識され、京大に計算機を導入する計画をお立てになりました。

当時、東大が開発中の真空管式計算機TACが稼動せず悪戦し、東北大学がパラメトロン式SENA Cの開発で苦闘中でした。よって京大は信頼性と実績のある電磁リレー式計算機にすべしとまじめに議論された時代でした。しかし先生は、信頼性で未知数だったわけですがその将来性をトランジスタ式にかけられました。日本の大学では京大が初めてトランジスタ式を実現しました。20世紀の前半が真空管時代で、その後半がトランジスタ時代となった、丁度その過渡期でした。

京大は、前田先生を始めとする先生方のご尽力で、一九五八年に国より予算が認められ、京大と企業との関係者の多大のご指導支援と努力で、一九六〇年夏にゲルマニウムトランジスタの計算機を開発し工学部1号館に導入することに成功しました。これが「京都大学デジタル型万能電子計算機第1号」KDC-I (Kyoto Daigaku Digital Computer-I) です。

小生は京大で初めてデジタル型計算機設計の研究をしていた関係で、博士課程2年のとき、企業よりの要請もあり、前田先生と企業との話し合いで、約2年間、日立製作所の研究所と工場に派遣されて、実際のKDC-Iの設計開発をやらせてもらいました。

この間、毎月、京都と東京を往復し先生にKDC-Iの設計開発状況を報告したが懐かしき思い出されます。KDC-Iは10進法の機械なのですが、一方、2進法の魅力もあり、2進法と10進法の両方の計算が出来る方式を考えて、これでやらせてほしいと方式設計案を持って、先生のところへ談判にいったことがありました。先生は、他では動かなくて困っている技術は一步一步順序を踏め、今回はまだ早い、今回は「とにかく確実にうごくコンピュータを作ってくれ」と言われました。そこで、Zuralkatという標語を机上にかかげてKDC-Iの論理設計など各種設計を行いました。もともと信頼性重視の会社の性格がこれに加わり、KDC-Iは戦艦大和のような巨大頑丈な機械に仕上がってしまい、やり過ぎたかなと思われました。

先生の工場視察などもあり、連続徹夜の調整をやりました。KDC-Iの本体部分が一九五九年暮れ稼動に成功し、直ちにテストを兼ねて、本機の配線問題を計算さ

す。

せて人手設計と比較できたときは感激でした。また、先生との約束の「うごくコンピュータ」の目処がたち、ほんとうに安堵しました。我が国の計算機の創世期に、「計算機を作りたい」という夢を、前田先生に叶えさせていただきまし

た。このKDC-1の研究開発で小生は先生が主査の博士号を頂きました。手元に残る多量の細部にわたる設計資料を見るに付け、先生の心暖まるご支援を思い出します。

信頼性のお陰でしょうか、3年ももたず腐陳化するこの進歩の激しい世界にもかかわらず、KDC-1には隠れファンがおられて、清野武先生が創設された京大計算センターで、なんと15年間も使われました。ゲルマニウムトランジスタも15年間は大丈夫ということでした。KDC-1の性能は現在のパソコンにも及びませんが、設置時なんと全学より200人強の方々が共同利用されました。今ではとても信じ難い事実です。

KDC-1は、HITAC102Bとして商品化されました。情報処理学会の会誌の計算機の最初の広告が一九六〇年第一巻第二号を開いたところにあり、写真も掲載されていますが、それがKDC-1です。本機は経済企画庁の第一号機ともなりました。日本国経済に

どれだけプラスだったかマイナスだったかまでは分かりませんが、先生の蒔かれたデジタル技術の種が種々のところで花をつけた一例として、京大にとって大変名譽なことでした。

前田先生と計算機との係わりといますと、忘れられないのは、京大大型計算機センター創設の建設本部のとき、富士通の初めての大規模F230/60の提案を受け入れたことと、まだこれは紙上のみの未だ存在していないベーパーマシンでした。先生は、京大としてはリスクが大き過ぎるかもしれないが、技術的にもしろい、ひとつこれでやってみようかといわれました。小生には、これが本

当に出来るものかどうか、計算機開発の経験者としての技術調査をしてほしいと言われました。小生は工場にお邪魔して設計者と顔を突き合わせて、半導体技術とコア技術など詳細を調査して、非常に有能な技術者がおられることと、その高い技術力に安心し、その旨を報告したのが懐かしく思い出されます。

先生は、つとに情報分野の重要性に配慮くださり、小生の属している情報工学教室の創設にも大変なご貢献をたまわりました。その創設委員をつとめてくださいました。この件でも我々一同、先生に

は深く感謝しております。

今、世はこぞってマルチメディアとかしましいわけですが、その根源のアイデアは音声や画像のアナログ信号を符号化してデジタルにする、いわゆるPCMであることに変わりありません。ところでなんと、先生は戦前にこのPCMの特許をおもちだったとの噂を聞いたことがあります。これは先生に一度直接お聞きしたいと思っていました。その機会を失ってしまい、非常に残念に思っています。先生の思い出は尽きることはありませんが、ここでは先生と計算機の分野との結び付きを記しました。

公的はもちろん私的にも生涯の恩師として、哀悼の念とともに衷心よりの謝意を捧げますとともに、一生学者としての生涯とそごご偉業に深甚の敬意を表する次第です。

この場をおかりしまして、私ども夫婦共々、先生の御夫人にも深く深く感謝の意を捧げますとともに、何時までもご健勝で過ごして下さいることを心より願っています。

(平成8年2月)

京大情報工学教授



平成8年度洛友会総会通知

一、年月日

平成8年5月25日(土)

一、場所

ホテル京阪京橋7階

(京阪京橋駅ビル内、JR京橋駅すぐ)

TEL 06-353-0321

一、行事

受付 15:00~

関西支部総会 15:30~16:10

本部総会 16:10~17:00

懇親会 17:10~18:30

一、会費

会員 四、〇〇〇円

同伴者 二、〇〇〇円

ただし平成8年3月卒業生は無料会費は当日受付にてお支払い下さい。

なお、これで総会出席通知に代えますので、ご出席の方は5月10日までにご連絡をお願いします。本会へはご家族同伴を歓迎しますので、多数お誘い合せの上ご出席下さい。

京大だより

京大アメリカン

フットボール部8年ぶり

4度目の日本一

1月3日(水)、アメリカンフットボールの日本選手権(第49回ライスポウル)が、東京ドームに5万1千人の観衆を集めて行われ、京都大学(学生代表)が2年連続3度目出場の松下電工(社団法人代表)を35対21で破り8年ぶり4度目の日本一に輝いた。学生は日本一は、平成2年度の日本大学以来5年ぶりである。最優秀選手(MVP)には、阿部拓朗(農学部4年生)が選ばれた。

これに先立ち、昨年12月17日(日)、第50回甲子園ボウル(東西学生王座決定戦)が阪神甲子園球場で行われ、京都大学(関西1位)が2年連続3度目出場の法政大学(関東1位)を24対17で破り、3年ぶり5度目の学生日本一に輝いた。なお、この大会における表彰選手は、年間最優秀選手(ミルズ杯)には、伊藤重将(農学部4年生)、最優秀選手には、杉本篤(工学部3年生)が選ばれた。(京大広報No.497より)

平成7年度の停年退職教官

平成7年度は教授53名、助教3名、講師3名、助手1名が、本年3月31日付けで退職された。洛友会関係の教官は次の方々です。

佐々木昭夫

電子物性工学専攻(量子工学)教授

授を退官。

(昭和30年電気工学科卒)

木村 馨根

電子通信工学専攻(伝送メディア工学)教授を退官。

(昭和30年電気工学科卒)

西川 禎一

電気工学専攻(複合システム論)

佐々木昭夫教授退官記念講義ならびに退官記念講演会・パーティーのご案内

左記の通り、佐々木教授の退官記念講義ならびに退官記念講演会・パーティーを開催致します。ぜひ御参加下さいませようお願いします。

一、退官記念講義

日時 平成8年7月22日(月) 13:30より

場所 工学部電気総合館大講義室

演題 電子の世界の過去と未来

電子管、量子効果半導体を超えて

連絡先 〒606-01 京都市左京区吉田本町

京都大学工学研究科電子物性工学専攻科

野田 進(075-753-5297)

なお退官記念シンポジウム・パーティーは11月16日(土)午後から都ホテルにて開催される予定です。

教授を退官。

(昭和30年電気工学科卒)

津田 孝夫

情報工学専攻(計算機工学)教授を退官。

(昭和32年電気工学科卒)

平成7年度卒業生進学就職状況

平成8年3月6日

Table with columns: 種別, 修士, 学部, 進学・就職内定先. Rows include categories like 進学, 大官公庁等, 電力・ガス, 通信, 電気関連会社, 鉄道・運輸機械・自動車, 放送, 留年(学部).

平成7年度電気系教室卒業生の進学就職状況

卒業生の進学就職状況

電気工学教室主任

昭和31年卒 阿陪 稔

電子物性工学教室主任

昭和45年九大卒 松重和美

電子通信工学教室主任

昭和33年卒 田丸啓吉

平成7年度の電気系教室卒業生

の進学ならびに就職の状況をご報告申し上げます。

本年度の卒業生は別表にありま... 進学が11名、他大学博士課程への進学が1名、就職が80名でした。

本年度は業界の全般的な不況に加え、関西では阪神大震災の影響も大きく、求人数を減少された会社も多かったのですが、有難たいことに当電気系教室への求人数は依然として多く、就職希望学生は100パーセント採用していただきました。本年度も前年度にひき続き、電気電子関連の業種への就職が大多数を占め、本来の姿が定着しつつあるように感じております。

毎年のことではあります、学生の就職につきまして、洛友会会員諸兄にはいろいろとご高配、ご援助をいただきました。教室主任として厚く御礼申し上げますとともに、今後ともよろしくご支援のほど、お願い申し上げます。

会員寄稿

ギャングとの8年

西川禪一(昭30年卒)
京都大学工学研究所
電気工学教室

◇はじめに

洛友会事務局長の矢木原さんから、京都大学アメリカンフットボール部(通称ギャングスターズ)が本年初頭の1月3日、東京ドームのライスポウルで社会人代表の松下電工インパルスを打ち破り、

8年ぶりに日本選手権を獲得したのを記念して、同部部長の小生に何か一筆せよとのご指示を頂いた。昨年春頃のギャングスターズは穴だらけのチームで、日本一などとてもおぼつかない感があった。そのギャングの優勝は、8年間部長を務め間もなく京大を停年退官する小生にとっても、思い掛けず嬉しい出来事であったので、喜んでお引き受けすることにした。なお優勝に際して、洛友会の幾人かの方から電報・電話・FAXなどのご祝意を賜った。この紙上をお借りして厚く御礼申し上げる。

さていまどき、国立の京大チームがスポーツで日本一になるといふのは、正直言って奇蹟ともいえる出来事である。昨秋、関西学生リーグで私学の強豪、関西学院大と立命館大を相次いで打ち破り、次いで関東ナンバーワンの法政大に勝ち(甲子園ポウル)、最後に社会人チームを倒すという、3つの高いハードルを越えなければならなかったからである。8年前に比べて、日本のアメリカンフットボールの水準と人気は、格段に向上した。その厳しい状況の中で、なぜ勝てたのか。また、勝ち切ることにどんな意味があったのか。その辺を考えながら、ギャングを巡るいくつかのエピソードとコメントを記してみた。

◇強気の部長

タッチダウンというわが国で唯一のアメリカンフットボールの専門誌がある。その最近号、ギャングスターズの優勝を報じた記事の中に、次のような一節があった。「そろそろ、学生が勝たんといかんでしよう。勝たんよ。でも、きつと勝つと思えますよ。ウチは。本当に」

甲子園ポウル終了後だった。京大工学部教授の西川禪一部長が、随分自信ありげにこう言う。多分少困惑気味に水野監督が何とも言えない笑顔をその後ろでぞかせていた。

ところがその3週間後のライスポウルで、京大はいともあっさり8年振り4度目の栄冠を勝ち取ってしまった。試合後のハードルを一通り済ませた京大戦士らが胴上げを始めたが、その第1号がこの西川部長だった。……。

「私は確信していましたよ、今日の勝利を。この一年間、彼らの成長は本当に目を見張るものがありましたから」と西川部長は、頬を綻ばせて甲子園ポウル終了後の必勝宣言の胸のうちを明かしてくれた。聞けば、近く退官の予定だという。チームを影で支えてくれた恩人に対する礼を尽くしたギャングスターズは、気持ちのいいほど意志の疎通ができた「大人」の

集団であった。

些か恥じ入りたい記述だが、強気の部長に立派に報いてくれたギャング達を、改めてほめてやりたい。

◇日本一のコーチング・スタッフ

監督の水野彌一君も言うように、スポーツで勝とうと思ったら必要條件は3つである。すなわち、まず優秀な素材(選手)を揃えること、次に優れたコーチを配すること、そして最後に良い環境条件を整えることである。市場でベストセラーになる商品を生み出すには、

素材(材料)、技術者、加工設備がそれぞれ一流でなければならぬのと、まったく同じ理屈である。しかも、3条件がばらばらでなく、システムとして適切に効果を発揮できなければ駄目である。

これらの3条件に照らしてみると、第1条件を満たすのは京大では所詮無理である。厳しい入試の枠をやっとくぐり抜けてきた京大生の大半は、学力は優秀でもスポーツの素材としてはマイナス偏差値の方だろう。超優秀な高校選手を重点的にスカウトできる私学や、プロ野球並みに計画的補強のできる社会人チームとは、雲泥の差がついてしまう。だから、第2と第3の条件をできるだけ良くしてカバーするよりない。

水野監督を含めたギャングのコーチ陣は、正直言って日本一だろう。OBや大学院生、学部留年組がボランティアとして、目一杯やってくれているのである。選手個々の心身の特徴と能力を把握し、練習や実戦のビデオを詳細に分析して、まずは栄養の取り方、身体の鍛え方から、基礎技術の習得、戦術の理解などをきめ細かに指導する。ビデオテープはチーム全体の動きだけでなく、自軍各選手のプレーの長所・短所、また相手のチームや選手個々の特徴、さらにはアメリカの一流プロ・チームの戦いぶりなどと、多岐にわたって用意されている。だから、ギャングのクラブハウスに蓄えられたテープの量は今や膨大なものである。そして、それらを幾度も繰り返し見つけて分析するから、テープはもとよりVTRやビデオカメラでも毎年数台を使い潰すほどである。頑健で俊敏な身体というハードウェアに加えて、戦術・戦略というソフトウェアもフットボールの重要な要素なのである。

◇クラブハウスの建設

残念ながら、国立大学のスポーツ施設は私学・会社などに比べて甚だ貧弱であり、京大もご多分に漏れない。ギャングにとつて、いわゆる農学部グラウンドがメインの練習場であるが、その土や水は合格点の域に達したばかりである。

右にも述べたように、フットボールはすぐれて戦術的で緊密なチームプレーを必要とするスポーツだから、グラウンドでの練習のほか、普段にミーティングを繰り返して戦術・戦略を徹底的に理解し、また互いにツーカーで意志の疎通を図れるようにしなければならぬ。

部の後援会(現会長は、元総長の沢田敏男先生)のご尽力で、多くの方々から多額のご寄付を頂いて、数年前にグラウンドから歩いて10分くらいの所(叡電・元田中駅北側)に100坪ばかりの土地を取得し、4階建のクラブハウスを建設した。これが、今やチームにとってかけがえのない施設となり、素晴らしい環境を提供してくれているのである。

クラブハウスには、幾つかのミーティング・ルームのほかに、食堂、浴場、トレーニング・ルームなども整えられており、食堂では選手個々の体質に見合った食事が摂れる仕組みになっている。建設を目指してご寄付をお願いに行った当時、一介のスポーツ・チームが大それたことを計画して、きついお小言を頂戴した向きもあったが、また特にバブル崩壊後は正直言ってだいぶ苦勞もしたが、多くの個人ならびに法人のご理解とご好意を得て、とにもかくにもほぼ理想的なクラブハウスを建て

ることができた。当時、洛友会関係でお世話になった方も多く、改めて心から御礼申し上げる次第である。

◇トータル・システムとしてのギャングスターズ

フットボールにはオフフェンス11人、デフェンス11人の選手がフィールドに出るが、彼らも絶え間なく交代する。その他、キッカー、パンターなどスペシャル・チームの選手も何人が要るから、最低40から50人の一線級選手が揃っていないと行かない。ちなみに、現在ギャングに籍を置く選手は100乃至150人である。

しかし、フットボール部を構成しているのは彼ら現役の選手だけではない。彼らの活躍を支えるコーチ、マネージャのほか、トレーナー、メディカル・コーチ、それに何人かのチーム・ドクターの先生方など、目に見えない所で働く裏方が沢山居てくれるのである。分けずとも、チーム・ドクターの先生方はまったくの手弁当で、親身に選手への面倒を見て下さる。試合中の怪我の治療や身体の手入れだけでなく、普段の栄養管理・健康管理の指導や試合後の怪我の手当て・リハビリ等々、先生方のご恩にはまったくお礼の言葉もない。ちなみに、永年栄養管理の指導をして頂いているのは、私の同級生で洛友

会常任幹事を務めている木村磐根先生の奥様で、京大医学部社会予防医学講座助教授の木村美恵子先生である。

もちろん、先にも述べた後援会やGGC(グリーン・アンド・グレイ・クラブ)と呼ぶファンクラブの皆様方のご支援も、力強い励ましになっている。

それら様々なボランティアの人達がそれぞれに熱い情熱を持ち、大きなハンディを背負って戦うギャングスターズに、そしてカレッジ・フットボールに、何とか華を咲かせてやりたいと懸命に力を貸して下さっている。それらの力が有機的に結びつき、システムとなつてチームをこの度の優勝に導いてくれた。

他のアマチュア・スポーツでは、今や私学優位そして社会人優位と相場が決まってしまった感がある。相場が決まった中で、少々あがいてみても所詮は無駄だろう。そんな諦めとモラトリアムが今の世の中のあるこちに見られるのではない。しかし、不利な状況のもとでも明確に目標を設定し、その目標に向かって懸命に知恵を絞る、真摯な努力を積み重ねてそれなりのお返しを返す。そのことを「システム」づくりができれば、やがて結果は出せる。そのことを如実に示したという意味で、今回の優勝は若い選手達に大きな教訓

と自信を与え、これからの人生にも大きな心の糧となるだろう。同時に、世の中にも些かのインパクトをもたらすことができた、とおがましくも自負している次第である。

◇おわりに

書き出したらつい長くなつてしまった。思ひは尽きないが、この辺で終わりにさせて頂こう。今年のシーズン、ギャングはあらゆるチームのターゲットとなるから、当然極めて厳しいシーズンになるだろう。オフフェンス陣は卒業による抜けが少ないので一層の成長が期待できるが、昨年、史上最強とまで評されたデフェンス陣は主将の伊藤や、鈴木、阿部などと主力の抜けが多く、どこまで立て直せるか気がかりである。しかし、来年は京大創立100周年、フットボール部創部50周年という記念の年なので、当然連続優勝を狙っている。部には後援会という組織もあるのだから、洛友会の方々にも大勢ご加入頂き、ご支援をお願いできれば幸いです(年会費1万円、種々の特典があります)。

また先日、水野監督から「先生も退官後少し暇になられたら、実際の作戦計画に使えるコンピュータ・シミュレータのようなものを、是非作って頂きたい」と要請された。シミュレータは小生の永年の

夢でもあるのだが、どなたか協力頂けたらというのもお願いの一つである。

この8年間、小生はギャングの仲間達から多くの事を教えられた。最後にこの上ない贈り物を贈ってくれた彼らに、もう一度心からの礼を言いたい。

インドで驚いたこと

松橋達良(昭17卒)

もう20年程も前になるが昭和53年の8月、デカン高原西部の有名なヒンドゥー、仏教窟院遺跡のエローラ、アジャンタの見物を終えた一行は、次いで首都デリーにはいった。そしてその日のデリー市内と翌日のアグラの見物には、デリー大学日本学科卒業とかで現地の旅行業者に勤めるソム・ダット君が当ることになった。

日本語の案内人

ソム・ダット君の日本語は、勿論耳に響くに優雅とまでは行かないが、その話す内容は聞き返さずに黙って聞いていて90%は分かる程のものであった。そしてデリーとアグラの案内を終えた彼は、次の朝早くに我々をベナーレスに送り出す関係上、我々と一緒にアグラのムガル・ホテルという素晴らしいホテルに泊まることになつ

た。

彼はなかなかのインテリで、夕食後、「インドについて何かお話しませんか、ご連慮なく私の部屋においでください」と言った。

ところで我々一行は、全国歴史教育者インド研修旅行と銘打っていたため、中学の社会科の先生達が大部分で、それに無類の旅好きな女医さんが加わり、中で先生と呼ばれる資格のないのは私と家内だけであった。先生方は殆んどが30歳以下の若い中学の人達であったが、私はソム・ダット君に誘われるままに彼等数人と夕食後その部屋をおとすれた。

部屋には、彼の配慮かどうか知らないが、デリー大学物理学科の学生と地元アグラで中学の教師をやっている若い二人がたむろしていた。そしてソム・ダット君はまず「インドのことなら何なり」と言うと、日本人はまずカースト・ヴァルナ制度のことを聞きたがるから、これについて話しましょうか」ときた。

そこで私は「いやその話の前に、君の日本語はなかなか立派だが今後の君の更なる上達のために申し上げよう。昨日今日の案内の中で、君はインド独立の志士の銅像や記念碑の所で盛んに愛国人という言葉を使っていた。その言葉自体は

決して誤りではないが日本では愛国者と言うのが普通だ。人は人も者という字を使って愛国者と言う。今後はそう言いなさい」と言っただけで、彼は大笑喜んで、知識が一つ増えたとばかりに早速手帳を出して書き込んでいた。

愛 国

そう言いながら、私はかたわらの中学の若い先生方に「そうですね皆さん、その方がいいですね」と相槌を求めた瞬間である。中の一人が首を少しかしげながら「いま日本で愛国という言葉を使いますか。それは何やら右翼が使う言葉ではないですか」ときた。他の2、3人もそうですよと言う。そして彼等は、別に私を咎めるふうでもなく何か自分自身に問いかけるような口調で「愛国という言葉はいけない言葉ではないでしょうか。それは軍国主義につながり、他国への侵略へと進んで行くことですから」と言う。

この言葉が妙な団体の連中からならともかく、中学の社会科の先生の口から飛びだすに及んで、私はびっくりたまげてしまった。その場にいたソム・ダット君がこれをどう聞いたか私は知らない。そして、いま一人のこれも若い先生は何か遠慮がちに「まあ松橋先生、いろいろながあつて今学校では、愛国と言う言葉は口にしない

ことになっていくんですよ」と私を慰めるかのように言った。そこで私は「そうですか、驚きました。すると皆さんは生徒に国を愛せよとは言わないのですか」と問い返した。すると先生の一人が「ええ、国を愛せよとは決して言いません。でも隣人、市民、県民を愛せよとは教えています」とも付け加えた。全く驚くべきことをインドで耳にしたものである。しかしこの先生方にこういった教育を受けた中学生も今は30歳代の健全な人達になつていてであろう。そうなるとおかしなのは校内に生活する特殊な連中だけであるのかも知れない。旅とは何かにつけて見聞を広めてくれるものである。

都世田谷区上北沢3-23-20
TEL 03-3303-4848

『生きがい』を考える

地主利男(昭29卒)

今から3年余り前、定年を迎えた。

最初の間は一日をどうして過ごせばいいのか、ほとほと戸惑った。会社生活約40年、朝8時から夕方5時まで(時には12時、1時になるが)の決まった生活、それ以前の学校生活も18年間、計58年間も

の間、一応パターンが決まった生活をして来た。それが急に『あなたは自由だ。何をしてもいいよ』という生活が始まった。当初は自分の長年の経験が生かせ、マイペースで出来る仕事を探した。これならという仕事が見えて来た時、病気になるた。

平成5年3月5日昼前、右胸の上部が妙に痛んだ。近所の病院に電話すると直ぐ来いという。車を運転して4、5分。駐車して病院の玄関に迎えてくれた車イスに座ったことまで記憶にあるが、そこで意識がなくなつた。気がつくとき県立病院の集中治療室にいた。心筋梗塞だった。1週間位絶対安静が続いたが、その後リハビリに努め4週間後に退院した。痛みはひどくなかつたので、もし夜起こつていたらそのまま寝て朝冷たくなつていたらさう。1年後、冠動脈造影検査し普通の生活を続けていたの事。生活も撰生に思い入れ、体重を減らし体調はここ10年来無いくらい好調になつたが、医者に成人病検査を勧められた。毎年の行事である。エコー検査に異常が出た。腎臓下部に小さな悪性腫瘍が見つかった。(腎臓ガン)。即入院で一週間後、右腎臓を全部摘出された。早期発見のお陰で3週間で退院した。1年経つての検査では異常なく、飲んでいた軽い抗癌

剤も取りやめになつた。この二つの経験が私に『人間明日のことはわからないぞ。大切なのは今日を生きたこと』ということを教えてくれた。若い時ほどとは言えないが、今健康についてはいい状態を維持している。自分のペースで動いている限り、体も心も調子いい。

振り返つて自分の人生を考える余裕が出来て来た。

私は昭和29年に大学を出た。當時は今と比較にならないほど就職難の時代だった。各種の業界自体朝鮮動乱が終わり特需景気もなくなつて全てがこれからの時代だった。将来が殆んど見えなかつた。当時の川崎航空機(株)にやっと入社した。その後は無我夢中で航空機産業再開後の会社が伸びて行くため働いた。会社のため、国のために努力したという意識はなく、ただ情熱を持って仕事に取り組んだ。これは私達世代に共通した思いだろう。『給料も少し上がれ』の願いは長年続いたが、給料稼ぐため働いたという意識はない。

その結果、何も物の無かつた時代から物が溢れだし、会社、国は大きくなり今世界の経済大国としての役割を立派にはたすようになった。これは全て私達世代の努力の賜物と自負している。特にこの国の経済成長は政治、

政策によってもたらされたものでなく、例えば自民党池田首相が所得増論を打ち出したから、田中首相が日本国土改造論を言い出したため、日本経済が急成長したとは思えず、一般の人々の努力が生み出したものであると思う。

この間、世界の人々の意識も変わって来た。一つのイデオロギーで全てを律することは不可能になった。ベルリンの壁は壊れた。冷戦時代は終わった。ソビエト連邦も崩壊した。日本でも自民党一党支配の時代は終わった。今政治は右往左往の時代に入った。この混沌状態は当分治まりそうも無い。国民生活に与える影響甚大である。よその国ならとくにクーデターが起こっているだろう。

人々の価値観は変わり、非常に多様化してきた。総ての人を満足させることの出来る政治は、日本は勿論、世界中現時点では不可能で真面目に政治を考える政治家の頭を悩ませている。発想の転換が要求される時代である。

今までの当たり前と思いついてきたことが、次々に壊され、多くの人が同意できること、より普遍的なもの(多くの人がこれはおかしいのではないかと内心疑問に持っていたことが、正しいものとして具体化され、多くの人の同意を得られるものになってきている)

がことの大小を問わず実現され始めている。

前置きがやたらに長い、ここからこの文章の本文が始まる。

以上のような事を踏み台にして、**定年後のサラリーマンの「生きがい」**について考える。

この前の月曜日の昼前10時半頃歩いて10分足らずのスーパーのカメラ屋に写真現像焼き付けを頼みに出かけた。スーパーに着くまでに4人、スーパーの中で7、8人、カメラ屋で3人、60歳から70歳位の人達が所在なげにしているのを見掛けた。この時点から、以前から何となく問題だと思っていたことが意識に登り始めた。

現在の定年制度が何時定着したかはよく知らない。しかし定年というのは『あなたはもうこの会社で勝手にやって下さい』ということである。

少なくとも60歳早いところでは55歳で大多数のサラリーマンは定年退職、御役御免になる。これが当然だという常識になっていて、定年退職Ⅱ世の中から不要で引退という常識、考え直す時期ではなからうか。

今日は敬老の日、各地で催しがあるのだが60歳代の人殆んど関係ない。招待状もこないし、本人達も待っていない。今問題にし

ているのは主として60歳から70歳の人達である。人生寿命80歳時代になった。まだ人の寿命は伸びるだろう。本当に高齢化し立ち居振る舞いに不自由な人だけは老人と呼ぶに抵抗はない。それ以前の人はどうか。

私のいる住宅団地は約3000世帯、昭和40年始めからサラリーマンを中心にマイホームを作り始めた。近所の人は皆ほぼ同年代の人であり、私の家の向こう3軒隣りの人も殆んど現在定年退職したばかりである。

この人々は全て「生きがい」を求めて模索している。大半がどうすればいいのかわかえあぐね、色々な事をトライしている。満足だという生き方をしている人は少ない。長年積み上げてきた知識、熟練、経験による、その人、その人ならではのものをもっているがそれは職場を離れたら何の意味もない。

人の「生きがい」「幸せ」もつといえ、生きたという実感「がどうすれば実現されるだろうか?人は「自分の得意とすることをやり、それが世間に認められた時」に「生きがい」「幸せ」を感じる」という。この人々は例外なく私と同じように「戦後の日本の隆盛を担って来た」という自負があると思う。この人達に「生きがい」が与えられない社会は異常ではないか。

たまたま今日NHK教育放送が、私の定年戦略、「それぞれの生きがい探し」という番組をやっている。ニュース番組の裏になるので今まで殆んど見てないが、今日の放送を見ても「定年を当然と受け止め、その後の人生をどうするか」という議論に終始していて、ボランティア活動として、生活困難なお年寄りの看護をしている方が『生き方の見本』と出席者一同の賞賛をあげていた。私はこの人の過去の蓄積が気になり素直に喜べなかった。この人はこれからの人生を過去の経験も生かせず、こうして生きていって「生きがい」「生きて来た実感」が本当に得られるのかと、私だけかも知れないが、「仕方なくやっていると、本心は寂しい」、と語っているこの人の本当の姿が見えるような気がした。

最近、老化や遺伝子、免疫等人間の成り立ちの基本である分子生物学に興味があつて関係する書籍テレビ番組等を好んで読んだり見たりしている。これらから得られる情報では、人間の個体差は若い時に比べ、50、60歳以上の年の人では可成り差が大きくなって来るという。いつまでも40台と同じような働き出来る人、私のように死に損ないの病になる人、体の衰えが目に見える人、色々である。

つまり人によって年齢だけで出来る事を決めるのは難しい。こういう状態が人間の自然の姿であるのに、今の社会制度は年齢によって(55歳乃至60歳)ひとくりにこの人達全てに引導をわたすのは非常におかしいことではないか。これらの人々、特に同年代の友人に「年を意識するか?」と聞くと「ない」という答が帰ってくる。

前に述べたように人はそれぞれ生きて来た歴史だけ、それぞれの人特有の知恵、経験に基づく、固有の知識、才能がある。サラリーマンの世界だけこれが無視され一様に世捨て人にならねばならないのは何故か。政治家の世界には定年はない。御役人は定年後も何か仕事の出来る道が用意されていることが多い。自営業の人、芸能人や芸術家にも定年はない。いつてこれらの人が特別に体が丈夫とか上記のサラリーマンの知恵、才能以上のものを持っているとは思えない。

一般に人は自分の経験しないこと、自分が遭遇しないだろうということには鈍感である。政治家が無頓着なもの、定年制度は当然というような考えが固定しているのだろう。会社にしても給料、待遇その他難しい問題が多すぎるので無視しているのである。特に現

在会社経営に携わっている人は不況にまともに対応せねばならず、難しい問題ばかりでそれどころでないに違いない。そして、これらの事は政治家、経営者に無縁のことでもある。

ここで一休みして最近目にした詩を引用する。

◇人間賛歌

人は年をとるごとに
ぜい肉を切りおとし
アタマは冴えて
つみ重ねてきた知恵はかがやく
年をとることは
意味がある事なのだ
老人などと言ってはならぬ
一步一步
ほんとうに
生きてきた人たちなのだ
その勇気をみよう

この人々(定年を迎えたサラリーマン)の知恵、経験を社会に還元し、我々に「生きがい」を与えられる社会は出来ないだろうか、というのがこの文章の趣旨である。平均寿命は飛躍的に増し、長寿社会がやってきた。定年後20年近くをまた新しい生き方を模索せねばならぬ時代がやって来た。これは誰もが何時か迎えなければならぬ問題である。政治もマスコミも故意か、そうでないのか(答が出ないからか)解らないがこの問

題には触れない。

福祉行政は必要なことである。しかし福祉の恩恵を必要とする人よりも、圧倒的に多くの人々の「生きがい」という「ところ」の問題への福祉活動がもっともっと表面に出て来ているのではないか。近い将来、国民3人に1人、60歳以上の老年者が占めるという。

一人一人考えて済む問題でもないし、直ぐ解決出来る問題でもない。時間が必要であるが少しづつでも解決すべき問題ではないか。政治家、会社経営者、それに定年に当面する人々の知恵が必要である。解決案としては画一的にならず、該当する人々に多くの選択肢を与えられねばならない。個体差を十分考慮する必要がある。スポットライトの当たっている人のためではない。大多数の無名の人々の問題である。これには定年後の年金の問題もある。今の厚生年金ではやっと食べて行けるだけで、従来のサラリーマン時代の生活レベルは全く保証されない。この問題は別途、述べる必要がある。

「生きがい」を自分で見つけだし、自分の世界に生きている人もいる。アメリカ人の知人は殆んどが、リタイヤーを心待ちにしている。この人達は相応の給料(私達の3、4倍)取って、リタイヤー以前から十分計画し人生の後半を

生きたいように生きようという人達である。

とにかく、最低いつ仕事から退くかは、自分の意志で決められる世の中であって欲しい。真面目にひたすら一生懸命働いて来た人、もっと言うと思直で、不器用な人程、定年時のショックは大きい。定年問題は難しいが、ゆつくり考える必要のある問題だと思う。

拙い文章ですが、この文章を読んで同意出来る人は、一緒に考え一緒に出来るだけの活動をしましょう。私達と私達の子孫のために。1995年9月15日敬老の日に。岐阜市北山2-18-1 TEL&FAX 058-241-8525

南ア雑感とIECの問題点

本田忠宏(昭39卒)

昨年(一九九五年)10月、23年振りに10日余り南アを訪問して来ました。インド洋に面したダーバン市でのIEC(国際電気標準会議)総会への出席でした。世界40数カ国から約1200名の参加者が集まり、初日の歓迎セレモニーには文化・科学大臣やダーバン市長の挨拶がありました。ただ、会期中に日本人を含む数名が白昼・中心

部や会場近くの海岸通りで金品の強盗に遭いました。会議の後、南ア最大の都市・ヨハネスブルク市に移り北郊のホテルに3日間滞在しました。今は治安が悪いとのこととで日本人はもう誰も都心には行きません。最近日本人旅行者が身ぐるみはがされたそうです。昔は都心のフラットに2度、計9ヵ月間住んでいて夜も繁華街を散策したり映画を見たりしていました。

当時はアパルトヘイトにより黒人は夜は郊外の黒人居住区に帰ることが義務づけられ許可がなければ都心に残ることは出来ませんでした。今回やはり住んでいたフラットやよく通ったレストランが懐かしく黒人ドライバーに恐る恐る都心を走ってもらいましたが見かけるのは殆んど黒人でフラットも街も汚れていました。昔のヨハネスブルクの都心の美しさはもう戻らないのでしょうか。郊外は桜に似た紫色のジャカラランダの花が美しく咲いていました。

ダーバンでのIEC総会ではその一分野でTC22/SC22Gという委員会が産業の基幹である「可変速ドライブシステム」の日本代表委員として参加したものです。それまで数度パリを始めヨーロッパ各都市で開催された国際規格案の審議に参加していますがそこでまとめられた規格案が今回その成

果を問われたものです。IEC加盟国の投票結果待ちですが本年中には国際規格として発行されることになるでしょう。

一方でIEC規格では英文でも小数点をフランス流の「,」(カンマ)とすることになっています。米・英では日本と同様小数点は日常的に「.」(ピリオド)が使用されていることをダーバンでの総会で米・英の委員より確認していましたが彼らもIECでそうなるというなら従わざるを得ないという態度です。今IEC国内委員会では私が唯一人、「そう決定した経緯を明らかにすると共に米・英を巻き込み小数点」とするよう運動すべきである」と提案しています。小数点が「,」では電機工業界にとって今後一般的となるIEC規格による輸出ビジネスが重大事となりますが残念乍ら殆んど知られていません。

今後ともIECでは新規国際規格作成に貢献すると共に、「小数点の本田」と呼ばれる位ねばり強く問題解決に尽くそうと思っております。

追記・昔の南ア滞在を含めアルジェリア訪問のこと等は小著「日立エンジニアの多言語マスター体験」に紹介しており、小著のことは洛友会会報第169号でご紹介いただきました。以上

支部だより

東京支部

旅行会報告

東京支部では、恒例の旅行会を平成7年11月5日(日)に実施しましたので、概要を報告いたします。当日は、これ以上ないようなすばらしい天気恵まれ、昭和9年ご卒業の河野勝也様をはじめ、総勢67名のご参加をいただきました。今回は『横浜の新たな名所を訪ねて』と称して、最近、新たな観光スポットが続々と出現しつつある横浜地域を目的地としました。

今回の目的地は都内から比較的近いということもあり、東京集合組と横浜集合組に分かれることとなりました。東京集合組は、東京駅丸の内南口に集合の後、臨界副都心などを見ながら、レインボープリッジ、横浜ベイブリッジなどを経て、横浜に向かいました。

横浜集合組とは『みなとみらい21』地区の横浜ランドマークタワー前で合流し、同タワーの展望台に登りました。展望台からは、抜けるような青空のもと、四方にひろがる見事な景色を楽しみました。またモールでウインドウショッピングを楽しまれた会員の方も

いらつしゃったようでした。

ランドマークタワーからは、昼食のために、横浜中華街の老舗『晴珍楼』に向いました。同店で、広東料理のフルコースを賞味の後、中華街や山下公園の散策を楽しみました。

続いて鶴見にあるキリン横浜ビアビレッジを訪問しました。ビアビレッジでは、ビールの歴史についての展示や製造行程などを見学するとともに、製造の途中段階のビール(のようなもの)を試飲するなど、楽しい時を過ごしました。また最後には、仕上げた生ビールを一杯いただきました。



当日は、行楽シーズンにあたり、お入り人混みもかなりのものでしたが、交通渋滞に巻き込まれることもなく、秋晴れのもと、横浜の新名所とともに思い出深い一日と

なりました。

写真は、キリン横浜ビアビレッジでの歓談風景

(平成7年度東京支部会計幹事 昭和52年卒 七原 俊也記)

同窓会だより

共振会(昭16・3卒)

秋季西伊豆地区

旅行会報告

平成6年4月20・21日高山地区旅行の席で次回は西伊豆地区と立案され、平成7年2月頃から東部共振会幹部の肝煎り(きまじり)で平成7年11月15・16日西伊豆地区旅行が確定した。

11月15日(水)午後1時30分全員新幹線三島駅南口に集合。始めの計画では此所からライナーバスで沼津港に行き、船で土肥港に向う予定であったが強風のため、船が欠航して急遽計画を変更、バスにて陸路136号線を南下、西伊豆スカイラインを通って土肥金山に向うことになった。

折角の晴天に海路を利用出来なかつたのは残念であるが、さすが天城山系の陸路は山が深く九十九折の道を蛇行し、駿河湾の景観を

俯瞰しつつ南下して土肥金山に着。『遠雁に航路灯つく駿河湾』

土肥金山……徳川幕府直轄の金山として慶長大判小判の地金を産出し佐渡に次いで栄えた所で、当時の金山奉行大久保石見守は金山の繁栄に大いに貢献した由である。

抗道には18体の人形が昔ながらの鑽(たがね)を使って金の鉱石を手掘りして掘っている風景、鉱石の選別、運搬、水替作業等を始め抗内風呂の風景等を再現している。

隣の金鉱館には金にまつわる諸資料を展示している。

土肥金山を出てバスは一路『桂川シーサイドホテル』に向う。ホテルに着いて各自部屋にて旅装を解き、入浴後6時から宴会。宴会に先立ち、記念撮影後、高山旅行以後鬼籍に入られた則内茂氏、野田三郎氏、秋田夫人を偲び、御冥福を祈って黙祷を捧げ、会計報告、欠席者の現況報告の後宴会に入る。

各自の現況報告から始まり、宴酣にして、有志の小唄、演歌、民謡等が出て、和氣藹藹(あひま)の内に8時半お開きとなる。

翌16日7時朝食、8時半ロビーに集合。観光バスにて海岸沿ひの道を南下し、途中の湾で、加山雄三のヨット等を眺め、海岸の景観を楽しみながら堂ヶ島に到着。堂

ヶ島めぐりに向う。

堂ヶ島めぐり……遊覧船が港を出ると間もなく左手に中ノ島(ここので最大の島)の岩肌が見えて来る。此所の岩は凝灰岩で出来ているため波に浸蝕されて、岩肌は美しい横縞模様を画き、それが延々と続き、その途中に波に挟られた洞窟が次々と現れて、その美しさは筆舌につくし難い。

右を見れば蛇島の一際美しい横縞模様が目に入る。その名の如く、くつきりとした蛇の胴体の様な模様が着いていて、岩の姿形も実に奇抜で美しい。

左の無数の洞窟と綺麗な横縞模様が続くと続いて三四郎島が見れる。三四郎島とは、見方に依って3つにも4つにも見える所からついた名で、島の上には緑の松が生い繁つていて、その美しさは松島を彷彿させる。三四郎島は干潮時には陸続きになるそうである。此所を過ぎると象島、亀島と続く。

船はやがて深い『天窓洞』(天然記念物に指定)へ入って行く。

真つ暗な洞窟の中を南口から入って行くと、やがて左手の洞窟奥深く一際明るい西口が見える。さらに進んで行くと、天井から空に抜けた天窓があり、島の上に生えている立木が見える。実に珍らしい洞窟である。此所を抜けて堂ヶ島めぐりは終りとなる。

「頼朝の遠流の島や鷹とまる」

我々の一行は堂ヶ島を後にして元来た道を北上、修禪寺に向う。ガイド嬢の話ではスカイラインから天気の良い日には富士山が見えると言っていたが、この日は生憎曇りで富士山が見えなかつたのは残念である。

修禪寺……大同2年(807)に弘法大

師が修業したと伝へられる古刹である。前庭には手入れの行きとどいた立派な松が生い繁っており、紅葉とマッチして落着いた庭である。また此所は頼朝の長子二代將軍頼家が幽閉されて、後に暗殺された所である。この話をモチーフとした岡本綺堂の修禪寺物語で有名である。隣の宝物館には頼家公の遺品、大日如来像、修禪寺物語関係の品々等が展示されているが、特に大きな古面、川端龍子の龍の天井画等が印象に残った。

修禪寺を後にバスは葦山に向ひ、

葦山の『滝の園』で昼食。葦山の反射炉に向う。

葦山の反射炉……安政2年(一八

五五)に江川太郎左エ門が国防のため幕府に進言して築いた製鉄炉で、完全な形で現存する反射炉としては我国唯一の物で重要文化財に指定されている。此所に入ると先づ目につくのが、高さ16mの4本の煙突で、現在は煙突の周りに耐震のため鉄製の枠で囲っている。

(これは後につけたもの)煙突は、縦5.6m、幅5mの炉体に繋がり、炉体に置かれた鉄塊塊は、前方で燃やした燃料の熱が、天井で反射されて鉄鉄に当り、これを熔かす。熔かされた鉄は出湯口から流れ出て、鑄型に入れて大砲の形にして、これの中を繰り抜いて大砲にする。当時此所で100門の大砲と弾丸が造られ、江戸湾防備のため品川御台場に使われた。炉の横には、ずんぐりした当時の大砲の見本が置いてある。コンクリート製の24ポンド・カノン砲の模型も置いてある。出口には江川太郎左エ門の銅像がある。案内人(土産店の主人)の説明も仲々ユーモラスで面白かった。

「葦山の炉跡に響ぐ榎櫓の実」

葦山の反射炉を後にして江川邸に向う。



江川邸……葦山代官であった江川氏の邸宅。中世武家屋敷の姿を今に伝える銅葺き入母屋造りの建物。重要文化財に指定されている。孟宗竹に囲まれている庭園が見事。

「砲術師の役宅跡の橡落葉」

江川邸を後にバスは三島駅に向う。バスの中で次回候補地は名古屋方面と決めて三島駅にて解散。写真は「桂川シーサイドホテル」宴会場にて撮ったものである。

前列左から永安夫人、嘉田氏息女、

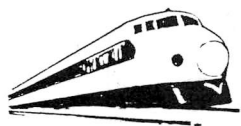
山本夫人、嘉田夫人、森本夫人、佐藤夫人、橘夫人、小林夫人、中列平井夫人、香川夫人、武田(正)夫人、副島夫人、石井夫人、武田進、森本芳夫、嘉田隆美、秋田清四郎、平井滋二、永安弘、河辺一、深海規

後列武田正三、坪井達夫、平野敏也、橋勝、石井嵩、山本幹次、大塚恭二、小原正敏、佐藤仁止、松垣登、小林忠男

撮影漏れ宮下一雄、計33名。

俳句は秋田清四郎氏作。

(小林 忠男記)



昭和18年卒業旅行会

— 横浜周遊 —

昭和18年卒業生の毎年恒例の旅行会は、平成7年11月13日、14日両日にわたり横浜で開催しました。総勢25名(うち夫妻8組、また関西から10名)参加、幸いにして好天に恵まれ秋の横浜の風情を楽しみました。

第1日は山下公園を前にした横浜ニューグランドホテルに集合した後、背後の極彩色に彩られた活気溢れる中華街の中のとときわ豪華な広東料理店で、舌づつみを打ちながらの夕食に、時間の経つのも忘れ語り合いました。

第2日は専用観光バスで名所を巡りました。先づ原三溪翁の創設による貴重な文化財の点在する紅葉の三溪園を散策の後、港の見える丘公園から横浜港を展望、エキゾチックな外人墓地を回り、メリケン波止場として著名な大棧橋からロイヤルウイグ号(二千七百屯)に乗船、ベイブリッジをくぐり本牧沖を回る間に、昼食のバイキング料理を堪能し、プロムナードデッキで潮風に吹かれました。下船の後再びバスで横浜ベイブリッジのスカイウォークへ行き、眼下を通る船舶や港の景観を一望

しました。

次いで昭和初期建造の海の貴婦人といわれた帆船日本丸を訪ねた。



昭和18年卒旅行会—横浜周遊— 平成7年11月13~14日

その後、「みなと未来21」にある日本一高層ビル(高さ296メートル)のランドマークタワーの69階の展望フロアに昇った時は、早や視界は薄暮に包まれ、JR横浜駅で解散の頃は日もとっぷり暮れました。

2日間にわたり些か強行スケジュールでしたが、旅情を楽しむ一方で、お互いに近況を語り最近の世情を慨嘆し孫の自慢をするなど、話題の尽きない内にいつしか旅程も無事に終り、お互いの健康を祈り来年の再会を約して別れました。

(木村 博一記)

卒業年次別

会費納入状況について

会員の皆様のご協力で平成7年度の会計事務も完了しました。

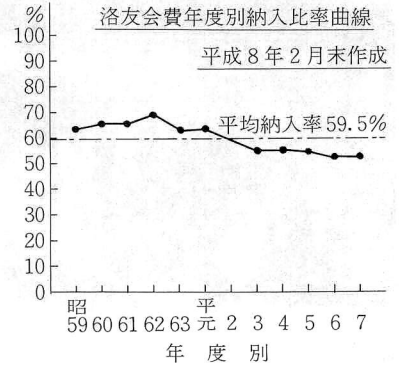
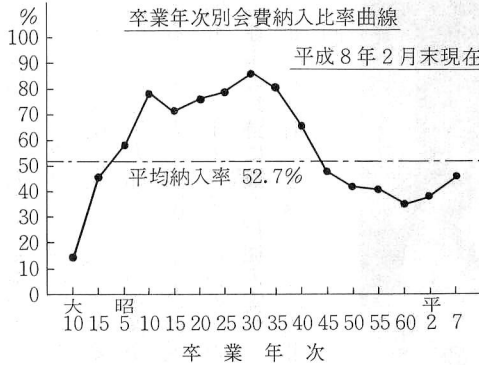
会費納入対象者数(A)5899名(平成7年卒業生まで)で、納入者総数(B)3111名で納入率(B)/(A)は52.7%。年度初めに「会費納入率向上キャンペーン」運動をおこし、会費納入に関して格別のご協力を賜りました。しかし平成6年度(前年度)に比較しても、さらに低調です。このままでは支部活動費にも影響しますので、今年はいは会費納入につきまして格別のご配慮を賜りますようお願い申し上げます。(本部事務局)

私達の学生生活(Ⅱ)

副会長 近藤文治(昭18卒)

(口)修学年限短縮

大東亜戦争勃発の前から、既にわが国は臨戦体制を強化し始め、高等教育もその例外ではなかった。



元来、学校教育は、『国家百年の計からは環境の変化に動じることなく、毅然として規定方針を堅守すべきである』などと主張できる程の余裕はなかった。昭和16年10月16日、官報をもって大学等修学年限の臨時短縮に関する勅令及び文部省令が公布された。これによつて、昭和17年3月卒業予定の学生は、4ヶ月繰り上げて16年12月

卒業とし、それ以後の学生は半年間短縮し修学年限を2年半にすることになった。当時、大学在学中の学生に対しては入営延期の措置があり、兵役の義務が猶予されていたので、修学年限の短縮は、一刻も早く学生を臨戦体制に組み込みたいと言ふ趣旨に外ならなかった。

この措置によつて、入学当初から授業の詰め込みが猛烈な勢いで行われた。修学年限が短縮されたからと言つて、学生の学力が低下しては困るので、一日の授業時間を増し、夏休みや春休み等の休暇を減らして、授業時間を確保する措置がとられた。このため「月火水木金」式の猛烈授業が実施された。夏休みは、以前は7月11日から9月10日までの2ヶ月間であったが、7月21日から8月20日までの1ヶ月間に短縮された。

7月17日、祇園祭りの頃から、ご承知のように、京都は猛烈な暑さになる。朝8時から午後5時まで、途中、昼1時間の休憩と1時間50分授業の間の10分間の休憩だけで頑張るのである。今のよう冷房がある訳でなし、扇風機も緑にない講義室で、ノート講義(教官の口述をノートに書き写したものを教科書代わりにする授業)であるから居眠りすることもできず、溢れる汗を拭きながら悪戦苦闘の

毎日であった。夏の5時はまだ日も高く、暑さも一向に収まる気配を見せない。その中を、私は、授業でクタクタになった身体に鞭打つて家路に急ぐのだが、一挙に家までたどり着くことかなわず、西大路四条で電車を降りて、少し西へ行ったところにあつた叔父の家立ち寄り、一休みするのが日課になっていた。

次号へつづく。

編集後記

今年の冬は寒さがきびしく、梅の開花も遅れたが、彼岸を過ぎると急に春らしくなり、桜の開花は例年通り。春本番の好季節となりました。

京都大学では3月26日(火)卒業式がありました。工学部電気系では修士93名、学部14名が卒業されました。心からお祝い申し上げます。

今年の洛友会本部総会は5月25日(土)ホテル京阪京橋で関西支部と合同で開催します。(詳細は前記参照方)また各地区の支部総会は、

- 4月22日(月) 北海道支部総会
- 5月10日(金) 中国支部総会
- 5月17日(金) 九州支部総会

5月25日(土) 関西支部総会
5月31日(金) 四国支部総会
6月7日(金) 東京支部総会
6月15日(土) 北陸支部総会
6月22日(土) 中部支部総会
右記のように懇親会を兼ねて計画されています。それぞれご案内がありますのでぜひ出席賜りますようお願い申し上げます。
本4月号より会報をA4判にしました。かねてより字が小さくて読みづらいとの苦情が多くあり、当号より要望に答え、字を大きく読みやすくしました。
平成8年度も洛友会にご支援、ご協力の程よろしくお願い申し上げます。

(事務局長矢木原邦雄記)

訃報

- 講昭2 富川 亘 7.5.26
 - 昭8 川守田孝吉 7.12.18
 - 講昭8 三好保憲 7.8
 - 昭10 藤本悟郎 8.2.9
 - 昭12 平田 穰 7.12.23
 - 昭13 福崎直治 8.1.1
 - 昭14 内藤正義 8.1.19
 - 昭18 安達時敬 6.12.13
 - 昭21 塚本龍雄 7.12.6
- 以上の方々がご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。